

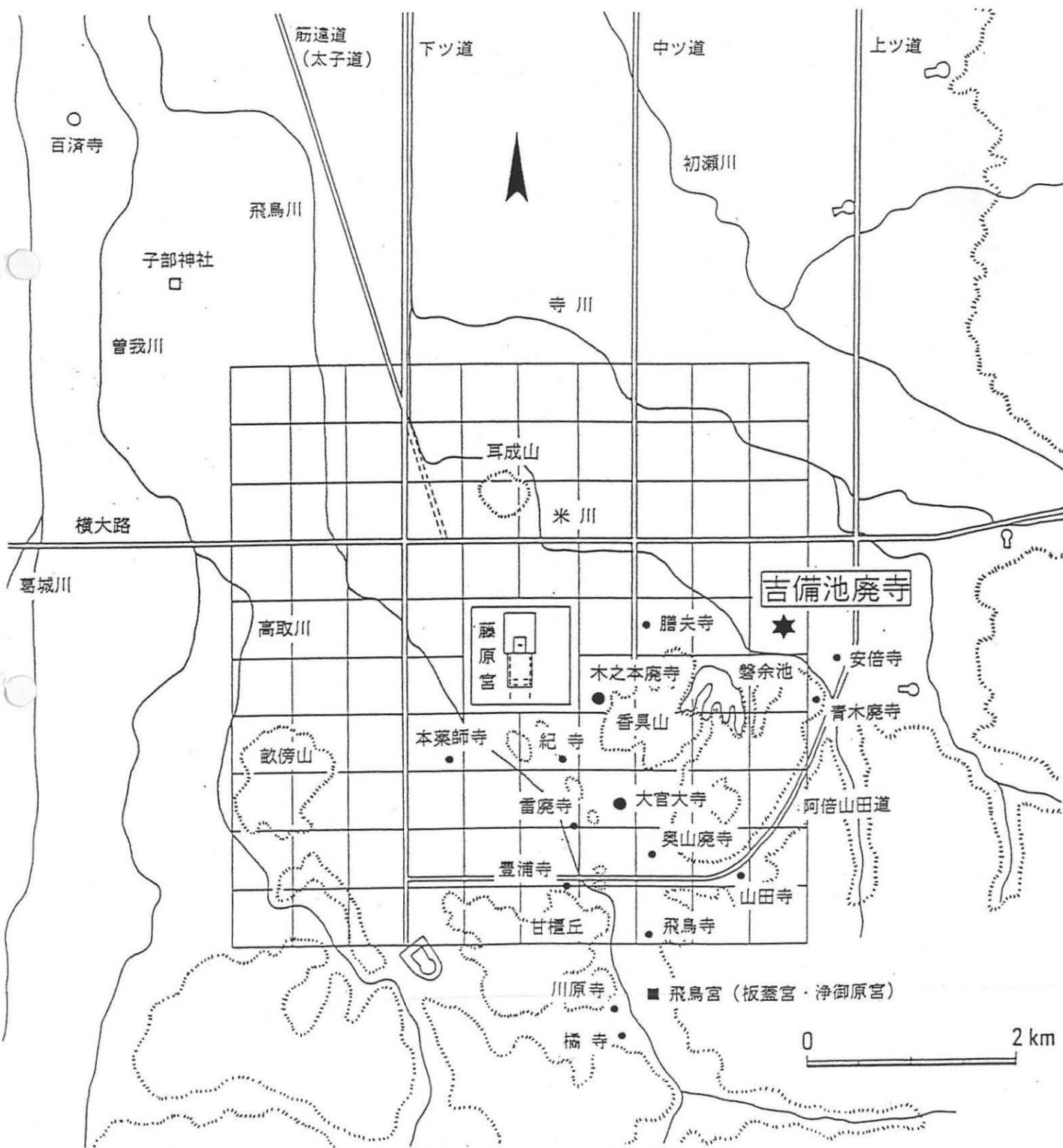
吉備池廃寺

— 巨大な塔基壇の発見 — 現地説明会資料

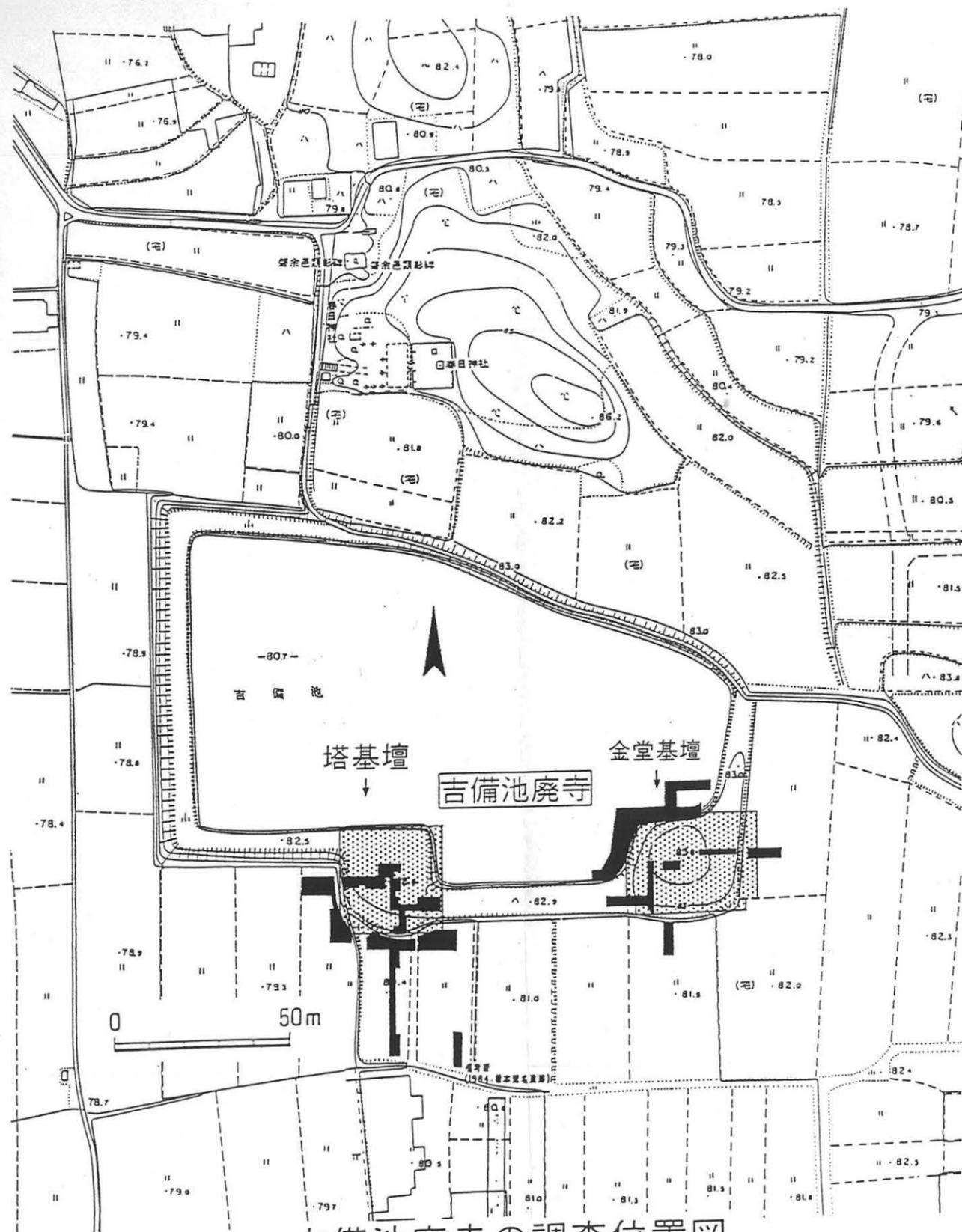
奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部

桜井市教育委員会

1998年3月14日(土)



吉備池廃寺の位置



吉備池廃寺の調査位置図

西の土壇は何か

吉備池廃寺は桜井市吉備にあります。農業用池である吉備池の東南隅と南辺に大きな土壇があり、池の堤の一部として利用されています。東南隅の土壇を昨年1月から3月まで発掘調査した結果、東西37m、南北28mほどで高さが2mもある巨大な基壇であることが判明しました。まず、東西37m、南北27m、深さ1mの長方形の大きな穴を掘って、石を入れ、版築工法（厚さ5～8cmの土を突き固めて厚さ3～5cmにすることを繰り返しながら地層を積み上げる）で基壇の基礎を丈夫にします。これを掘込地業（ほりこみじぎょう）といいます。そして、版築工法で基壇を高くしていきます。東の土壇は平面形から寺院の金堂とみられ、その大きさは飛鳥時代では最大です。出土した瓦の年代は640年頃なので、この基壇は639年に舒明天皇によって建て始められた百済大寺（くだらのおおでら）の有力な候補として考えられました。百済大寺は天皇が初めて建てた寺院です。

それではその西54mのところにある土壇は何だったのでしょか。その問題の解明と付近に回廊などの建物跡がないかどうかを確認するために、今年1月19日から発掘調査を始めました。それに先だって行った地中レーダー探査では、土壇部分は固くしまった状態であるという反応が出ましたので、基壇の可能性がきわめて高くなりました。発掘調査の結果、この土壇は版築工法によって積み上げられ、しかも一辺が約30m、高さが2.1m以上もある巨大な基壇であることが判明しました。そして、3月4日、ついにこの基壇が塔であったことを証明する決定的な証拠を発見したのです。

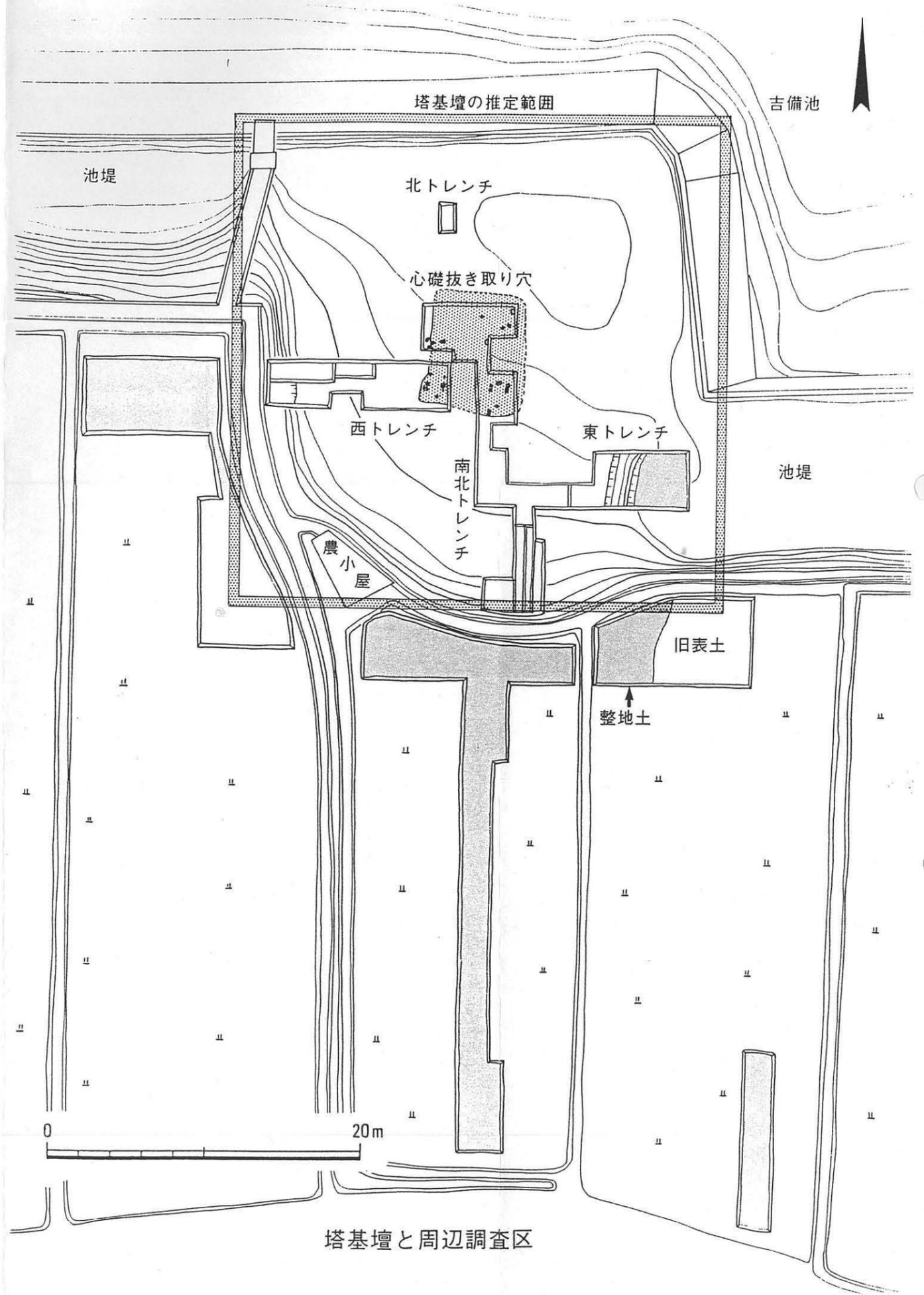
塔心礎抜き取り穴の発見

残存する基壇平面と推定金堂基壇の東西方向の想定中軸線から、この基壇が塔であった場合の中心を事前におおざっぱに予想しました。それに非常に近い位置で、東西約6m、南北8m以上の長方形の巨大な穴が見つかりました。残存する深さは約40cmです。その中には人頭大の石がたくさん残っています。この穴は大きさと位置からみて、巨大な心礎を抜き取った跡以外に考えられません。この抜き取り穴の幅は、飛鳥藤原宮跡発掘調査部が1978～1979年に調査した、香具山の南にある大官大寺の塔基壇の心礎の抜き取り穴の東西幅（5.4m）に近いものです。西基壇は塔だったのです。したがって、東基壇は金堂であったことも改めて確定できます。

心礎の抜き取り穴が巨大なのは、心礎自体が巨大だったからです。おそらく幅3～4mはあったでしょう。ちなみに大官大寺の塔心礎は100年ほど前まで残っており、岡本桃里はその見取り図と寸法を記録しています。それによると、南北約3.6m、東西約3mです。奈良県香芝市の尼寺廃寺の塔心礎は約3.8m四方で、日本最大です。東大寺の東塔心礎の長径も約3.8mです。吉備池廃寺の塔心礎も、それらに匹敵する大きさだったと推定できます。

抜き取り穴が長方形に近いのは、あるいは心礎の形を反映しているのかもしれませんが。つまり、心礎の底面から北に向かってスロープにして、巨大な心礎を北へ引き上げたからか、心礎が南北にやや長かったからでしょう。心礎の破片は残っていません。人頭大の石の一部は、心礎の根石です。

実は大きさが3～4mもあって非常に重い心礎を、残存高が2.1mもある基壇にどのように引き上げたのか、という問題を明らかにする発見がありましたが、その話をする前に、塔基壇をどのように作っていったかという話をします。



塔基壇と周辺調査区

広範囲で行われていた整地

塔基壇は版築をする前に、旧地表面に厚さ20~40cmの整地をしており、掘込地業はなかったことがわかりました。整地の範囲は塔基壇の下だけでなく、その南と西の水田部分にまで及んでいます。今回は回廊の痕跡はなかったですが、整地土の存在は、寺の建設工事の範囲が広大であったことを示すと同時に、今後の調査で新たな建物の痕跡や施設が発見される可能性があることを示しています。

この整地の重要な目的は、塔基壇では掘込地業をしないので、砂混じりのやや不安定な旧地表面に整地層を盛って、地盤を落ち着かせるためだったと考えています。もちろん、旧地表面は現地表面と同様に、東から西に向かって緩やかに低く傾斜していますから（東基壇の西端から西基壇の西端までの78mで約40cm低くなる）、基壇版築を積む前に旧地表面をより平坦にした可能性もあったでしょう。ただし、金堂基壇付近には整地土がないので、金堂と塔とでは建設のタイミングに微妙な前後関係があったのかもしれませんが。

見事に積み重ねられた塔基壇版築

塔基壇の西辺、南辺、東辺を部分的に断ち割った結果、整地土の上面から一層の厚さ3~7cmで積み上げられた見事な版築層を検出しました。塔基壇に掘込地業はなくとも、これだけの版築層を2m近くも積み上げて、基壇を完成させる技術があったのです。

基壇のまわりは本来、石材を用いて美しく整えていたと考えられますが、それはまったく残っていませんでした。おそらく、それははずされて、別のところで再利用されたでしょう。

心礎を引き上げるためのスロープの発見

巨大で重い心礎を、どんな方法で基壇の上部まで引っ張り上げたのでしょうか。基壇版築層の断面を西辺、南辺、東辺で比較してみました。南辺と東辺では下から上までほぼ水平に版築層を積んでいます。これに対して、西辺の下半部では明らかに斜めに積んでいるなど、特異な積み方を行っています。それは大きくA、B、Cの3ブロックにまとめられ、A→B→Cの順序に積んでいったと復原できます。

Aブロックの版築層はその傾斜を徐々に強くして、整地層上面となす角度を最終的に最

大20度ほどにする斜面にしています。この斜面はそのまま基壇上面に続かず、基壇土半ばでほぼ水平にしています。つまり、Aブロックは基壇縁辺部寄りでは傾斜して版築し、基壇中央部寄りではほぼ水平に版築しています。さらに、この水平部分の上面では、小バラスを突き固めるという仕事もしています。この水平部分の上面と心礎の抜き取り穴の底面の高さが近接していることから、この傾斜面は心礎を搬入するためのスロープと考えられます。

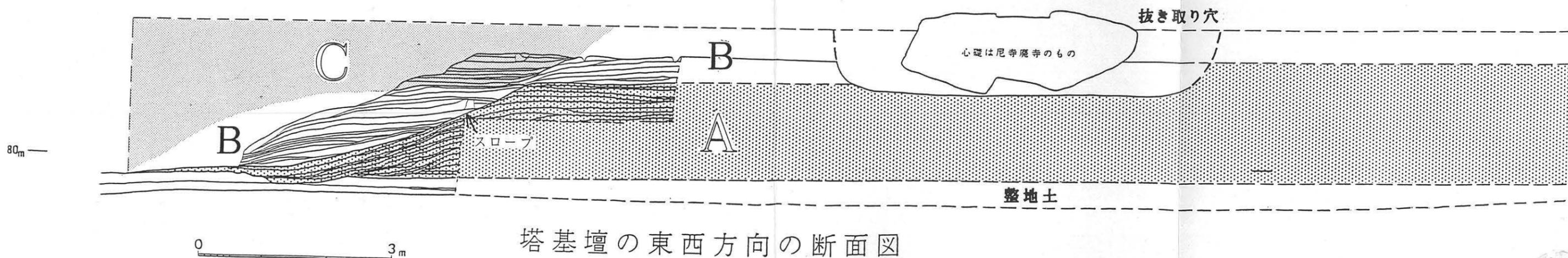
このようなスロープは香芝市の尼寺廃寺の塔基壇でもみつかっています。尼寺廃寺では北側にスロープを設けています。このスロープは塔基壇に特有なものといえますから、西基壇でこれがみつかったということは、西基壇が塔であるということの強力な証拠となるのです。吉備池廃寺の塔心礎は西側から引き上げたのです。

心礎の据え付け方と基壇版築の完成

心礎は版築層Aブロックの水平部分の上面を引きずられて、基壇中心に達したのです。ここに根石を置いて礎石を据え付けるための穴を設けていた痕跡がありそうなので、現在それを探しています。

続いて版築層Bブロックを積んでいます。これも基壇縁辺部寄りでは斜めに版築し、基壇中央部寄りでは水平に近く版築して、結果的にBブロックの上面は基壇上面を目指すような傾斜面となっています。この2つ目の傾斜面はほかの礎石を基壇上面に引き上げるためのスロープかもしれません。さらに、その外側に版築層Cブロックを水平に積み重ねます。これ以上上位に版築層を積んでいたかどうかは不明です。この段階あたりで心礎以外の礎石を据えたと考えられますが、今回これに関する証拠は得られていません。今後の塔基壇の全面調査の結果に期待しましょう。

私たちは最初、心礎は基壇の中央のかなり深い位置に据えられていた（これを地下式心礎と呼ぶ）と予想していました。それは飛鳥寺（明日香村）、山田寺（桜井市）、尼寺廃寺（香芝市）などのように、飛鳥時代の塔の心礎は地下式であるものが少なくないからです。これに対して、吉備池廃寺では基壇の相当上部（旧地表面から1.5m上）に据えられています。基壇頂部の版築層が削平されていますので、心礎の上面が地上に露出する地上式か、少しでも基壇中に埋め込む地下式か、の問題に決着をつけることはできません。



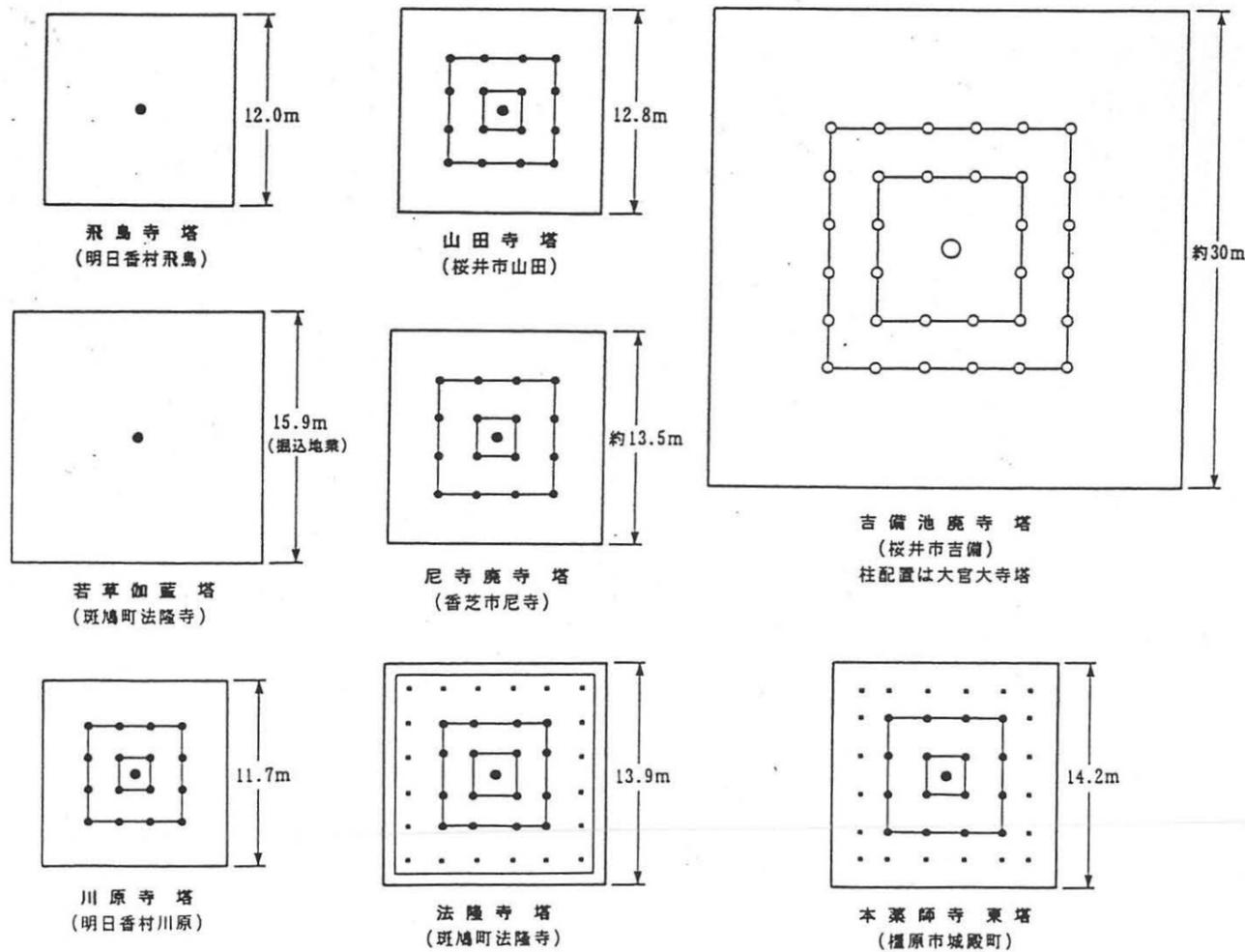
塔基壇の東西方向の断面図

塔基壇の復原

基壇土は北では少なくとも北トレンチの位置まで、東では東トレンチの近現代の南北溝の位置まで残っています。心礎抜き取り穴は南北にやや長く、この南寄りに3~4mの心礎があったと仮定します。想定礎石心（円柱孔など）から版築層がもっとも遠くまで残っている南北トレンチ南端までが約15mですので、この基壇の規模は一辺約30mに復原できます。これは飛鳥時代の寺院の塔基壇の平面形と比較して、群を抜いた大きさです。

基壇の残存高は旧地表面から2.1mです。吉備池廃寺の塔心礎抜き取り穴に、参考までに尼寺廃寺の高さ約1.2mの心礎を入れてみました。この周囲を版築で埋めるためには、基壇高は少なくともあと50cm高かったと推定できます（このことから基壇頂部は50cm前後削平されているといえます）。計2.7mから整地層40cmを引いても、2.3mは高さがあったことになり、これも群を抜いた数値です。

吉備池廃寺の塔基壇と比肩できるのは、大官大寺の塔基壇くらいしかありません。大官大寺の塔基壇の一辺は約35mですが、基壇外装の設置にまでは至らず、角度25度のスロープのままです。本来はスロープ部分を切り落として、一辺30m以内にしようとしたのでしょう。高さは推定2m（残存高1.2mに心礎の大きさを勘案した）です。

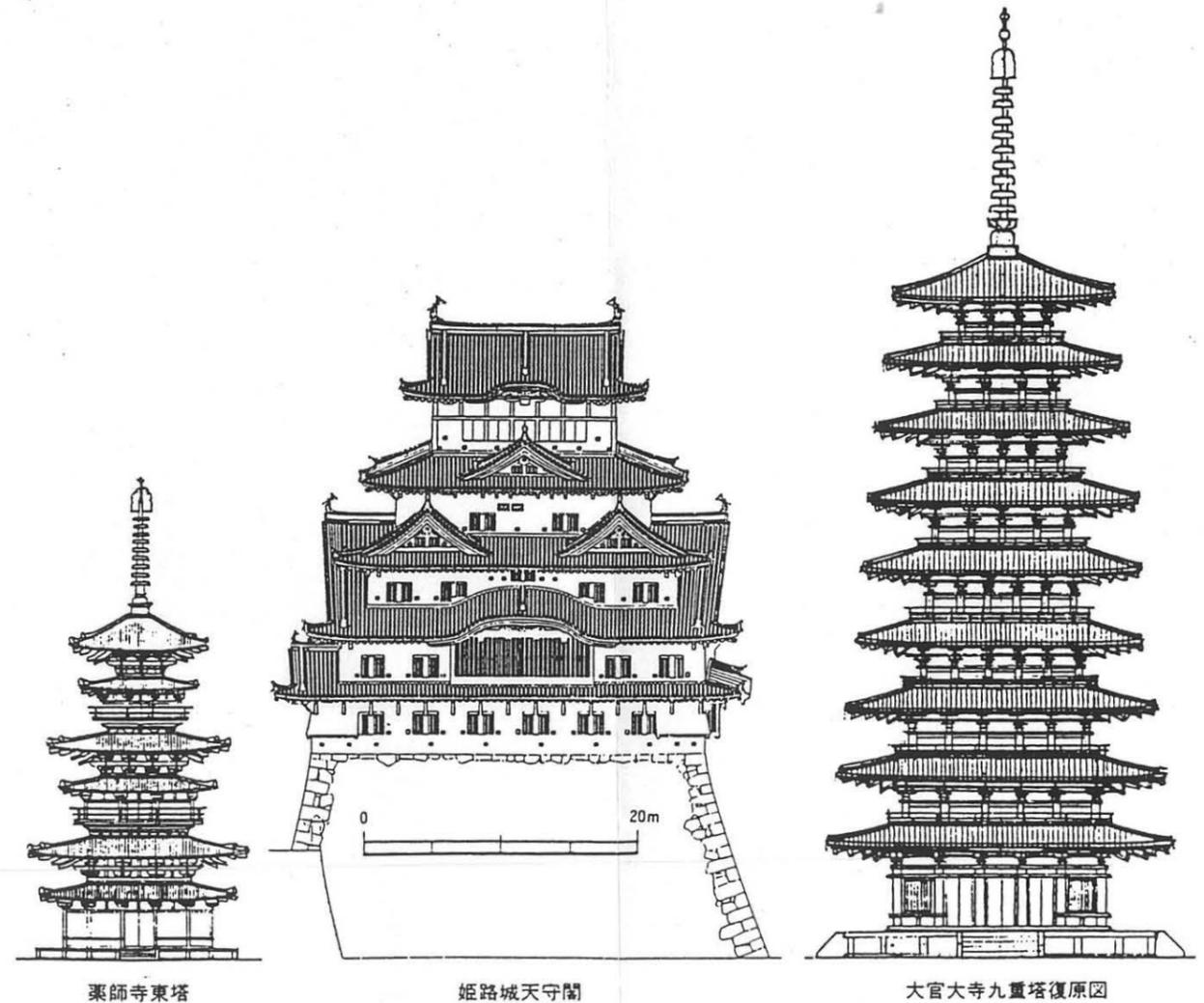


飛鳥時代の塔基壇平面規模の比較

なぜ塔基壇は巨大なのか

基壇も心礎も巨大だった理由は、この上に立っていた建物が巨大だったからでしょう。基壇規模が唯一近い大官大寺では、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳（以下、縁起）』によると、文武朝（7世紀末~8世紀初頭）に九重塔が建てられたと伝えています。大官大寺塔の建物礎石は側柱5間四方（1間10尺等間）、入側柱3間四方の、四天柱のない特異な配置で、建物の一辺が50尺（約15m）となります。日本最大の塔である東大寺の東塔と西塔は七重塔ですが、その初重はともに一辺55尺（約16.5m）、高さは東塔で33丈8尺7寸（約101.6m）、西塔で33丈6尺7寸（約101m）と超一級です。両者の初重の平面規模を比較すると、大官大寺の九重塔の高さも80~90mはあったでしょう。

吉備池廃寺では心礎以外の礎石位置に関する情報が不明なので、大官大寺の初重平面を借用して吉備池廃寺の塔基壇に重ねてみると、十分入る上に、さらに建物端から基壇端まで7.5mも空間部が残ります。初重の軒の出の問題を考慮すれば、柱間がさらに大きかったか、新羅の皇龍寺九重塔のように側柱を四重にめぐらす一辺7間の平面であった可能性があります。ともあれ、吉備池廃寺の塔基壇と心礎の巨大さからみて、そこに大官大寺に匹敵する九重塔が建っていた可能性はきわめて高いです。



九重塔とはいかに高いか

百済大寺・高市大寺の沿革

さらに高まった百済大寺の可能性

昨年吉備池廃寺金堂基壇調査の結果、吉備池廃寺金堂基壇の規模が飛鳥時代最大であること、その中心と西土壇（今回確定した塔基壇）の中心間の距離84mから推察される巨大な伽藍は、氏寺の範疇を大きく越えていること、その造営年代が軒瓦からみて640年に近接した時期であることから、吉備池廃寺は639年に舒明天皇の希望で建設が始まった百済大寺の可能性が高いことを報告しました。

今回の調査で西の土壇が巨大な塔基壇であることが確定したことによって、まず吉備池廃寺は最古の法隆寺式の伽藍配置になる可能性があること、東西両基壇の東西方向の中軸線がほぼ一致するように伽藍配置計画が存在すること、東西両基壇の中心間の84.6mという長大な距離と整地の範囲から推察される伽藍規模はきわめて広大であることが改めて明らかとなりました。そして、最大の成果は、吉備池廃寺の塔が大官大寺の塔基壇に比肩できる規模であることから、それが九重塔であった可能性があるという点です。『日本書紀』【縁起】によれば、日本における九重塔は大官大寺とその前身である百済大寺以外に例はありません。したがって、吉備池廃寺が百済大寺であった可能性は一層高まったものといえます。

東アジアにおいては九重の木塔といえば516年に皇太后の希望で造営が始まった北魏の首都洛陽の永寧寺が有名で、記録の検討によれば相輪を含む高さは147mもありました。そして、百済大寺が造営された7世紀前半には、百済の武王が弥勒寺（益山）で、新羅の善徳王が皇龍寺（慶州）で九重の木塔を建てました。皇龍寺の木塔の高さは、舍利函に刻まれた塔の修理記録によれば、約80mで、唐の影響を受けた、鎮護国家のシンボルでした。隋の文帝と煬帝が長安に建てた木塔も100mクラスのものでした。東アジアにおけるこのような超一級の塔は、皇帝、王、天皇及びその一族が関与して建てられたものです。

つぎに、『縁起』によれば、子部社神の怨みによって、九重塔は焼けたとありますが、今回も金堂基壇の調査と同様に、それを示す証拠はありません。

さらに、塔基壇とその周辺の調査では、吉備池廃寺の軒瓦は1点も出土していません。普通の丸瓦と平瓦の特徴は、昨年の金堂基壇調査時出土のものと同様ですが、出土量はわずかでした。つまり、昨年の金堂基壇の調査より少なかったのです。昨年はこの寺が移建したときに、移建先で再利用するためにもっていったからだという解釈を提示しました。今回の状況はそれを支持するものです。

基壇を築き、心礎を据え付け、瓦も運び込んだことは、ここにて建物を含む建設が行われていたことを裏付けるものです。現在、建物の建設と解体に関わる足場穴らしいものが1基みついています。将来、基壇上面を広く調査する機会に、残りの礎石や足場穴の問題が検討できると考えています。

吉備池廃寺の軒丸瓦2種の範型は、四天王寺の伽藍建物用の瓦を作るために運ばれています。それは7世紀の中頃のことと推定されます。おそらく、吉備池廃寺の主要建物の建設が比較的ハイピッチで進行したので、範型を移動したのでしょう。将来、東西の基壇周辺での調査を積み重ねていく過程で、この問題や他の建物の軒瓦の実態も解明されていくものと思われまます。

639 (舒明11年)	大宮と大寺をつくる。百済川のほとりを宮地とし、西の民は宮を造り、東の民は寺を作る。書直県をその大匠とする。 百済川のほとりに九重塔を建てる。	日本書紀	百 済 大 寺
640 (舒明12年)	百済川のほとりに子部社を切りひらいて、九重塔を建てる。百済大寺と号す。 社神の怨みにより、九重塔と金堂の石鷗尾を焼破。	大安寺伽藍縁起并流記資財帳(以下、縁起)	
641 (舒明13年)	舒明、百済宮に移る。	日本書紀	
642 (皇極元年)	舒明、百済宮で死去。宮の北で殯をおこなう。	日本書紀	高 市 大 寺 ・ 天 武 朝 大 官 大 寺
668 (天智7年)	百済大寺を建てるために、近江と越の人夫を動員。 阿倍倉橋麻呂と穂積百足の二人を造此寺司に任命。	日本書紀 縁起	
673 (天武2年)	丈六釈迦仏像ほかの諸像を百済大寺に安置する。	扶桑略記	
677 (天武6年)	天武、飛鳥浄御原宮で即位。 美濃王と紀臣訶多麻呂を造高市大寺司に任命する。 御野王と紀臣訶多麻呂の二人を造寺司に任命する。 百済の地から高市の地に寺を移す。	日本書紀 縁起	
682 (天武11年)	高市大寺を改めて、大官大寺と号す。	縁起	
685 (天武14年)	大官大寺で140人あまりを出家させる。	日本書紀	
694 (持統8年)	大官大寺・川原寺・飛鳥寺で経をよませる。	日本書紀	
701 (大宝元年)	持統、藤原宮へ移る。	日本書紀	
702 (大宝2年)	造大安寺官と造葉師寺官を寮に準じさせる。 造塔官と造丈六官を司に準じさせる。	続日本紀	
この頃(文武朝)	高橋朝臣笠間を造大安寺司に任命する。	続日本紀	
710 (和銅3年)	文武、九重塔と金堂を建て、丈六の仏像をつくる。	縁起	大 安 寺
711 (和銅4年)	元明、平城宮へ移る。	続日本紀	
716 (霊龜2年)	大官大寺焼け落ちる。 (大安寺を)平城京へ移し建てる。	扶桑略記 続日本紀	
880 (元慶4年)	百済大寺と「高市大官寺」の旧寺地である、十市郡百済川辺の田一町七段百六十歩と、高市郡夜部村の田十町七段二百五十歩を、大安寺の願い出によって返還する。	日本三代実録	